

## 殉職

災害時には、消防団員や消防署員、警察官、役場の職員、公共施設の管理者などが我が身を顧みずに献身的に活動されます。平成 23 年の東日本大震災では、これら多くの人々が、水門を閉めたり、住民に避難を呼びかけたり、高齢者などを誘導している最中に殉職されました。四国でも過去の災害を振り返ると、地域の人々を守るために職務中に犠牲になった人がいました。四国各地の例を見ていきます。

徳島県の八万村（現徳島市）では、明治 28 年（1895）8 月の出水時に、長谷の板橋が流出するのを警戒して橋揚げ作業をしていた消防手が、谷川に墜落して亡くなりました。同村では、明治 33 年（1900）の洪水時にも、消防手が園瀬橋の流出を警戒中に命を失いました（「八万村史」1935 年）。また、昭和 36 年（1961）の第二室戸台風の来襲時には、土成町（現阿波市）で九頭宇谷川の水位が上昇し、翫城地（がんにょうじ）橋上流で堤防決壊の危機に瀕したため、全町あげて出動し、堤防に土のうを積み、木流し作業を実施しましたが、その作業中に水防団員が濁流にのまれて亡くなりました（「土成町史上巻」1975 年）。さらに昭和 50 年（1975）には、台風 6 号による豪雨のため、木屋平村（現美馬市）川井地区で山崩れが発生し、生き埋めになった中学生を救出作業中に 2 回目の崩壊が起こり、消防団員 1 人と消防署員 3 人が犠牲になりました（「改訂木屋平村史」1996 年）。川井には「殉職の碑」が建立されています。

香川県の琴平町では、大正 5 年（1916）8 月の大雨により金倉川が氾濫し、五条の雄装軒（おそのき）橋付近の堤防が決壊し、水防活動中の消防手が溺死しました（「町史ことひら 5」1995 年）。松尾寺境内には「殉職消防組員慰霊碑」が建立されています。

愛媛県の大洲市では、昭和 18 年（1843）7 月の大雨により、大洲平野が一大湖水と化しましたが、この時、北裏では山崩れにより、滝の宮川が泥土で埋め尽くされ、警防団員が濁流にのまれて亡くなりました（「大洲市誌上巻」1996 年）。同じ 7 月の大雨により、城辺町（現愛南町）では、久良真浦の後の山が崩れ、民家 6 戸をつぶし、住民 3 人とともに警防団員 4 人が亡くなりました（「城辺町誌」1966 年）。

高知県の安芸市では、昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風による災害の調査に出動していた県職員が、大山岬の国道 55 号脇で大岩上に立ち災害状況を写真撮影中に高波にさらわれ命を失いました（「高知県土木史」1998 年）。遭難現場の大山岬には「殉職の碑」が建立されています。また、昭和 46 年（1970）7 月の集中豪雨により、北川村加茂谷では警戒・救助中の消防士と警察官が濁流にのまれて亡くなりました（「新安田文化史」1975 年）。加茂谷には「殉職碑」が建立されています。さらに、昭和 47 年（1972）の土佐山田町（現香美市）の繁藤災害では、最初の山崩れ後に家屋の土砂排除などを行っていた消防団員が二度目の山崩れで生き埋めとなり、消防団員、町職員、住民などが救助作業中に再度山崩れが発生し、繁藤駅前付近の集落や停車中の列車を押し流し、60 人が犠牲となりました（「昭和 47 年 7 月豪雨・繁藤山くずれ災害記録」1973 年）。繁藤には「慰霊塔」が建立されています。

世の中は、真っ先に災害現場に駆けつけて対応する献身的な人々によって支えられています。しかし、亡くなられた人の無念さや残されたご家族のことを思うと、言葉がありません。殉職者の碑の前では、せめて手を合わせたいものです。率先して防災に携わる人々の安全が確保され、文字通りに「身を献げる」ことがなくなることを切に願います。